

異国の星^上

井上 靖

講談社

異国の星 (上)

昭和五十九年九月二十日 第一刷発行

著者——井上 靖

© Yasushi Inoue 1984, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四—二二 振替東京入—五〇〇

印刷所——株式会社精興社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定 価——一六〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN 4-06-200987-0(0) (文1)

目次

ギルギット通信

5

カシユガル日記

51

ヒマラヤの月

137

沙漠からの手紙

245

H・F兄へ

あの夜の兵士へ

若き日の友へ

今は亡き作家ボロディン氏へ

富士を詠える兵士に

装
幀

西
山
英
雄

異
国
の
星
(上)

ギルギット通信

昨日、北京からバキスタン航空機に乗り込んで、カラコルム山塊の上を飛んで、ラワルピンディに入りました。北京空港を離陸したのは二時四十分、ラワルピンディに着いたのは九時四十分。空港で時計を三時間遅らせ、六時四十分になりました。

ラワルピンディに一泊、今朝、四十人乗りのプロペラ機で、このカラコルムの登山口とでもいうべき山の町・ギルギットに入りました。一時間ほどの短い空の旅でしたが、殆ど全部雪の山塊の上を飛びました。山の背、稜角、ことごとく雪で覆われており、手をのばすと、雪の面に届きそうな思いを持ちました。あっという間に、すばらしい早朝の雪山飛行は終って、機はギルギット空港に着きました。

——ああ、とうとうギルギットに来た。

これが空港に足を印した私の最初の感慨でした。空港をのせている小さい盆地は、四囲を全部、山に囲まれていました。

空港からタクシーで、そう遠くない疎林の中にあるチナール・ホテルというのに入りました。

マネージャーが出勤してないので、控室に荷物を置いて、ホテルの周囲を歩きました。ギルギット盆地を囲んでいる山々がすぐそこに見えています。かぞえてみると、全部で十五、六あります。

足の向く方に歩いて行くと、やがて辺りに人家が現れて来ました。家はみな石を積んで造られています。やがて表通りらしいところに出ました。商店らしい小さい家が並んでいます、午前中のためか、どの家も戸締まりしており、通行人もまばらです。

再びチナル・ホテルに引き返しました。要するにこの小さい不整形なギルギット盆地は、周囲をそれぞれ独立した十幾つかの山に囲まれていて、そこに空港もあれば、町もあり、その町の端っこの方に、私の泊ろうとしているホテルも位置しているということになります。

ホテルに戻って控室で待っていると、やがて五十年輩のマネージャーが姿を現し、部屋に案内してくれました。寝台は一つですが、何人でも入れそうな広い部屋です。

窓をあけると、窓からも盆地を囲んでいる山々が見えています。海拔一五〇〇メートルぐらいでしょうか。初夏の今も涼しく爽やかです。部屋の隅の卓の上には蠟燭とマッチが置かれてあります。電灯はともらないということでしょうか。洗面所を覗きました。バスはありませんが、シャワーはあります。これで充分です。ここは山の町・ギルギットであると、自分に言いかけました。バスを浴びようとか、電灯がとめる部屋で眠ろうとか、そんなことはもともと考えておりません。

いま、ギルギットの小さい静かなホテルで最初の夜を迎えております。八時の消灯までに二時間ほどありますので、K君、あなたへの手紙を書くことにしました。ギルギットに來たからには、あなたへの手紙を書かなければなりません。

窓の外には夕闇が迫りつつあります。時々ペンをとめて、耳をすませてみます。何の音も聞えません。本当に静かです。

ギルギットに來たからには、貴兄へお便りしなければと記しましたが、考えてみると、あなたから「ギルギットにて」と記したお手紙を、何本貰っていることであらう。登山家のあなたが世界で一番すばらしい山の町と折紙をつけた、そのギルギットの町に入り、世界で一番すばらしい山のホテルと、これまた折紙をつけた小さいホテルに宿をとった以上、何はさておき、貴兄へお便りしなければならぬといった氣持になり、いま窓際の机にむかってペンを執っている次第です。

あなたがおっしゃった通り、なるほどしっかりとりたい山の町であり、山のホテルだと思えます。こうした山の町にも、山のホテルにも、もちろん私は初めてです。

それにしても、あなたが繁くこの町を訪ね、このホテルから私に便りを下さった時から、いつか長い歳月が経過しております。あの頃から、いつかもう三十年近い歳月が経過しております。あなたはあれだけ熱を上げたカラコルムやヒマラヤの山々から、すっかり足を洗ってしまいまし

たね。青春との訣別と同じように、山とも別れてしまいましたね。残念な気もしますが、しかし、やはり貴兄らしく見事だと言えましょう。

——若い時は山に血道をあげ、その時期が過ぎたら恋愛に血道を上げ、またその時期が終ったら、あとは男はやはり仕事だろうな。

これは、いつか、手紙ではなく、直接あなたの口から聞いた言葉です。この三十年、あなたとはごくたまにしか逢っていませんので、あなたが自分の言葉通りに、あなた独自の情熱の使い分けをしたかどうか、実際のところは知りません。しかし、おそらく、あなたはそうしたに違いないと思います。

私の方は、あなたにずいぶん山に誘われましたが、どういふものか山には縁がなく、あなたの登山家としての末期頃から、小説を書くことに血道をあげるようになって、今日に至っております。

まあ、それはそれとして、いま私は、あなたの若い頃の恋人・ギルギットの町に来て、ギルギットのホテルから、考えてみればあなたへの初めてのお便りを認^{した}めています。

もちろん、あなたへの手紙を認めるために、わざわざカラコルム山塊の奥まったひだの中に入って来たわけではありません。あなたもよく御存じのフンザ、ナガールといった秘境を、数人の親しい学者やジャーナリストたちと一緒に訪ねる約束になっており、たまたま中国の辺境の旅をしていた私が、先にこの地に来て、直接日本からやって来る一行と、ここで待ち合わせることに

なったというわけです。

おかげで、四日か五日、このギルギットの町に滞在することができます。従って、毎夜少しずつ、あなたへの「ギルギット通信」を書かせて頂きましょう。

昨夜は消灯と共に、あなたへのお便りのペンを置きましたが、今日はこれから、同じように消灯までの時間を、ギルギットにおける二日目の御報告の執筆に当てましょう。

昨日は私以外に誰も居ない閑散としたホテルでしたが、今日は午前に一組、午後に一組の登山パーティーがやって来て、急に賑やかになりました。マネージャーの話では、一つはイタリア隊の先遣班、一つはフランス隊の、これまた先遣班ということでした。いずれも五名ずつの一団です。

イタリア隊の方は二時間ほど休憩しただけで、すぐジープで出発して行きました。フランス隊の方はここに一泊、明早朝の出発ということです。

山の知識の持ち合せのない私には、ホテルのマネージャーの口から出た、彼等が目指しているらしい山の名について、いかなる感慨も持つこともできませんでした。知識といえばカラコルムには七〇〇〇メートル以上の山々が、ヒマラヤを越える密度で集まっているというぐらいのことで、この知識にはいかなる実感の裏付けもありません。

カラコルムの山の名では、ただ一つラカポシというのを知っております。やがてフンザへ向う

時に走るカラコルム・ハイウェイから七七八メートルのラカボシの雪に包まれた美しい姿を見ることが出来る筈です。こんどのフンザ、ナガール行きの旅に加わることが決定してから、どこからともなく入ってきたただ一つの知識です。

K君、これまた甚だ失礼な話ですが、あなたが若い情熱のすべてをかけて目指した山が、カラコルムのいかなる山であつたかさえも、私は知っておりません。そうそう、あなたがギルギットを度々訪れていた頃は、カラコルム・ハイウェイなどというものはできていませんでしたね。パキスタンのギルギットと、中国のカシユガルを結ぶ道が造られたお蔭で、私のような者までがカラコルムの旅を企画することができるようになりました。申しわけないような思ひです。

今日は午後はずっと、ギルギットのメイン・ストリートをぶらついて過しました。なるほど、あなたが血道を上げるだけあって、淋しいほど静かな、いつまで歩いていても倦まないカラコルム登山口の集落でした。

メイン・ストリートと言いましたが、町と言えるところは、この通り一本しかなく、道の両側に石積みマツチ箱のような家が並んでいるひとかわ町で、何となく映画のセットの町を歩いているような思ひでした。そのセットの町を旅行者の私が歩くように、町の人々もゆっくりと歩いています。ほどほどの賑わいで、いつもぶらぶらしている大人や子供たちの数が、どこかで調節されているのではないか、そんな思ひさえ持ちました。一人退場すると、それに替って、新しく一人登場して来る、そんなメイン・ストリートの人間のばら撒かれ方で、いつ見廻しても町は同

じ表情でした。

町を歩いている限りでは、ギルギットという町の人口の二万という数字を、そのまま信じることはできません。おそらくギルギット川が造っている深い溪谷のあちこちに散在する小集落の人口を、全部集めた数字ではないかと思われます。

このギルギットという町も、ギルギット川の小さな河岸段丘の上の小オアシスに営まれた集落で、周囲に小さい耕地を持っていることでしょうが、その広さは知れたものであらうと思われます。

今日、メイン・ストリートをぶらぶらして一番驚いたことは、多少人が群っている小さいバザールの中に入って行くと、いきなり大きな釣橋の袂に出たことです。それがギルギット川の釣橋でした。

その時初めてギルギットという集落が、ギルギット川の流れの岸に、流れに沿って造られている町であることを知りました。町をぶらぶらしている限りでは、そうしたことを知ることはできません。それはギルギット川の流れが深く落ち込んでいるために、流れも眼にすることができないし、流れの音も耳にすることができないからです。しかし、このカラコルム登山口の集落は、ギルギット河岸にびったりと沿って、流れに平行して造られている町でした。

ギルギット川の釣橋から眺めた景観は、さすがに大きいものでした。川幅は五〇メートルぐらい、水量は豊富、白濁した水が滔々と流れており、上流正面にはカラコルムの山々が幾つも重っ

て見えています。K君、あなたが倦きるほど眺めた景観であろうと思われま

す。それからまた、これもあなたが倦きるほど眺め、心から惚れ込んだ風俗だろうと思いますが、全身を思い思いの布で覆い、顔のところで両手で布を押えて、顔半分を出している女たち。それからまた、だぶだぶの上着、だぶだぶのズボン、そしてこの地方独特のフンザ帽を頭にのせている男たち。

そうした男女の歩いているメイン・ストリートというか、商店街というか、バザールというか、そうしたところの散策はいつまで経っても倦きることはありません。顔を合せる通行人の男女も、店の男たちも、みな笑顔を見せてくれます。

道の真ん中に大きなチナールの木があります。これも覚えてい

るでしょう。老樹というか、大樹というか、ひと抱えもふた抱えもある大きなものです。そしてその傍には、いつも驢馬が立っ

たまま休んでいます。

面白いのはこの商店街の店仕舞の早いことです。夕暮近くなると、申し合せたように小さい商店は板の表戸を閉め始めます。表戸はいずれも青く塗られてあります。すっかり店仕舞してしま

うと、この町は無人の青い町になる筈です。

人々の引き上げ方も早いです。あつという間にバザールから、通りから、人の姿は消えて行

きます。カラコルムの深い夜の闇を迎えるためでしょうか。

店仕舞した商店街から帰って、シャワーを浴び、すぐ食堂に出ました。消灯が早いので、夕食